

2018年版のあとがき

本書の10.2節に、理論物理学の目的の1つは**未来を予言すること**である、と書いた。物理法則は通常、時間の二階微分方程式で書かれており、初期条件を与えてこれを解いてやれば、その系の未来を予言することができるように構成されている。

しかし、現実社会は複雑な系であるから、なかなかそうはいかない。未来を予測してあとで笑われても困るから、「予測小説」のバイオニアである堺屋太一の「平成三十年」を二十年ぶりに読み直してみた。1997年夏から一年間、「何もしなかった日本」という副題と共に朝日新聞に連載されたのを読んだときには、未来に暗澹とした不安を感じたものである。とはいえ一番記憶に残っていたのは、一万人を着席させ一度に酒食を供せるのは、中国だけだ、というくだりであった。

当たり前のことだが、この本には当たったところもあれば、当たらなかったところもある。少子高齢社会の到来と地方の過疎化、近隣諸国の台頭とわが国の経済的な没落は予想どおりといったところだが、スマホのようなデバイスの出現まで言い当てているのはさすがだと思う。

しかし、物価の大幅な上昇とスタグフレーションの到来やードル250円という円安は全く当たらなかった。その限りでは、日本は著者の予想以上によく踏みとどまっているといえることができるかもしれない。東日本大震災やそれに伴う原発事故も当然予見されていない。

この大震災が起こったとき、私は海外の多くの友人知人から見舞いのメールを貰ったが、そのとき一番記憶に残ったのが、台湾大学の長老、^{フアン}黄教授から来た、「日本人は強い(から大丈夫だ)。しかし、時に強すぎる。」というメールだった。今日の状況は、日本人の我慢強さ(と事なかれ主義)故に、切羽詰まっていよいよお手上げになるまで対策がとれない、という悪弊に陥っていることの反映だといえるかもしれない。

一方、「何もしなかった」どころか、しすぎちゃった部分も少なくない。それこそ、息を吐くように嘘を重ねるような人物^{ボクちゃん}が長きに亘って国のトップを務め、人事権を握られた高級官僚が、嘘つきボクちゃんを守るために公文書の改竄を指示し、自殺者まで出して結果的に官僚組織を崩壊させる

などということは、官僚出身のこの作家でなくても、二十年前には誰も予想もつかなかったことであるに違いない。日本銀行が国債を大量に買い入れ、出口戦略なき異次元緩和を続けるなどということも、当時の常識からいったらおよそ考えられなかったことだろう。

この本によると、2018年には、日本資本の企業として生き残るのは各業界二社で、残りは外資系に買収されるか、ニッチあるいは地方企業として生き残るか、だという。確かに、本書の初版を上梓した時にあった家電部門を持つメーカー、松下、東芝、日立、三菱、三洋、シャープのうち、民族系として生き残っているのは、松下改めパナソニック、日立、三菱だけである¹⁾。

淘汰されてしまった原因は、技術流出、製品の重大な欠陥、経営能力の欠如などさまざまだが、特筆すべきは、国策に従い、原発事業に入れ込みすぎて大赤字を出し、粉飾決算に走った結果、かえって傷口が広がり、遂にお手上げとなった東芝の例であろう。もちろん生き残った企業にしても順風満帆に來たわけではなく、いつとき経営戦略を誤っても、体力の残っているうちに改革を断行し、辛うじて復活を遂げてきたのである。

日本がどちらの道を歩むことになるのか。国家の品格を穢し続けるボクちゃんの下では、結果はもはや明らかな気がするが、私たちは何が起こってもしぶとく生き残れるよう、がんばりましょう。

2018年6月

横山順一

1) アイリスオーヤマが加わりつつあるのは、歓迎したい。